樣、但龍葵莖光無毛、五月入秋開小白花、五出黃蘂、結子無殼、纍々數顆同枝、子有帶生青熟紫黑、其酸漿同時開小花、黃白色紫心白蘂、其花如盃狀、無瓣、但有五尖、結一鈴殼、凡五稜一枝、一顆下懸如燈籠之狀、殼中一子狀如龍葵子、生青熟赤、以此分別、便自明白、

〔下學集下草木〕山茨菰（ホウヅキ）又云鬼燈、其（サンシコ）實赤如灯也、

〔東雅十五草卉〕酸漿ホヽヅキ　舊事紀に八岐大蛇の眼如赤酸漿と見え、日本紀もこれに依られて、赤酸漿はアカカヾチと註せられたり、古事記にも赤加賀智としるして、今の酸漿といふ者也と註し、又猿田彦神の眼の事をも、かくぞしるされたりける、太古の俗の常語とこそ見えたれ、倭名鈔には兼名苑を引て、酸漿一名洛神珠、ホヽヅキと註せり、並に義詳ならず、萬葉集抄に、カとは赤き也と見えたり、カヾとは其赤くして赤きをいひ、チとは其汁の血の如くなるを云ひしなるべし、ホヽヅキとは或人の說に、ホヽといふ蟲のつきぬる者なればかく云ふなり、ホヽとは蝨（イチムシ）也といふなり、

〔古今要覽稿草木〕くたに

くたに、古今物名、源氏物語、古今六帖、くたには苦蕘の轉音にて、酸醬のことなり、たんのんをにといふことは、しをんをしをに、せんをせにといふに同じ、古今集の打聞に、木丹の略也といひしは信じがたし、かがち、日本書紀神代卷通證云、重遠云赤燭血也、譬其鹹三色也云々、この說いかゞ、按にかゝは赫の字の意にて、明らかなることをいへり、出雲風土記に、光加賀明也と云ことみえたり、酸醬はその色赤くかゞやくものなれば、かゝとはいふなるべし、ちはそへいふことば也、ほゝつき、和名抄篤信云、保々は虫の名好て食之、故に名づく云々の說非なり、谷川士清云、保々都伎は火々著なり、この說よし從ふべし、火々は加賀と同じく、その色の熟するに從ひて、あかくかゞやくいろのそはる故に、火火著といふなり、ぬかつき、本草和名按にぬはは つ語にて、かづきは加賀著の中略なり、中略洛神珠、嘉祐本草本草綱目釋名時珍云、以子之形名也、三母珠、嘉祐本草名義同上、苦蔵、郭璞注爾雅本草綱目釋名時珍云、以苗之味名也、皮辨草、本草和名引古今注本草釋名時珍云、以角之形名也、下略